

1

---

〈私〉をめぐる問い  
—わたくしといふのはいったい何だ—  
(宮沢賢治)

---

三原 正資

---

日蓮宗現代宗教研究所長  
広島県妙長寺住職

---

令和3年（2021）1月7日、菅首相によって昨年4月につぐ2回目の「非常事態宣言」が発令されました。新型コロナウイルス感染症（Covid-19）第3波の猛威は1年前の第1波のときを遙かに超え、1都3県の人々は医療崩壊の危機におびえています。この宣言はまもなく7県にも発令され、危機は全国に波及するかもしれません。他人の心の中は分からないものですが、ひとり、東京・池上の宿舎で夜を過すとき、〈私〉の死を思うときもあります。

## 「いのちの体験」

岸本葉子氏（1961年生まれ）の『生と死をめぐる断想』（中公文庫 2020）は自身の病によって死についての思索を深めた勝れた本です。この「文庫版あとがき——パンデミックが揺るがすもの」の中に、岸本氏は次のように述べています。

現代日本人に死を意識させる出来事がもうひとつ加わった。新型コロナウイルスの世界的な流行だ。千年に一度の地震の後、百年に一度のパンデミックに遭遇している。（略）

世界が経験する第二次大戦後初の大量死。感染の危険があるため通常の看取りや別れの儀式ができず、葬送の文化や死生観に大きな影響を与えそうだ。

コロナに感染し、重症化し、ひとり死を迎え、検体として処理されたのちに火葬される〈私〉の姿を想像する……しばらくなかったことです。しかし、私（1948年生まれ）は10代の初めの一時期にそのような経験をしたことがありました。

『死んだ金魚をトイレに流すな』（集英社新書 2009）の中で、著者の近藤卓氏はこのような子どもの経験を「いのちの体験」と名づけ、次のように述べています。

いったいいのちって何なの？ 死んだらどうなるの？ どこから来てどこへ行くの？

不安や恐れの中で突然自分に襲いかかる、無限に続く問いかけ。この「いのちの体験」をどう乗り越えておとなになっていくのか。それが子どもの人生でいちばん最初にやってくる大きな関門である。

子どもは10～12歳のころ、この根源的不安を体験するといいます。私にも思い

出があります。夜の闇を見つめながら、父も母もいつかは死ぬ、この私も死ぬ、死ぬとはどういうことかと思ひ、無に帰す恐怖にふるえました。私なりの「四門出遊」の体験かもしれません。

哲学者・中島義道氏は次のように語ります。

私は六歳のころから、死んでしまうことが無性に怖かった。「無」になるのがどうしても納得できなかつた。これは正真正銘の病気で、私は何度も「死ぬのは厭だ！」と泣きじゃくって親や教師を困らせた。

(『狂人三歩手前』 新潮文庫 2009)

その後、私がどのようにしてこの「いのちの体験」を乗り越えていったのかはよく覚えていません。ぼんやりとした不安と共存して日々を過していたと思います。

今の子どもたちはどのような思いで生きているのでしょうか。

## 「わたくしといふ現象」

そのころの仏教学界の状況について宗教学者・山折哲雄氏は、

大学の講義で、仏教では「霊」を説かないと、耳にたこができるほど聞かされてきた(略)

(『宗教の自殺』 PHP 1995)

と述べています。私もある高名な仏教学者から同じ趣旨をうかがい、師父に伝えたと、絶句したことを覚えています。その中で、「人はどこから来て、どこへ行くのか」という私の煩悶に答えたのが宮沢賢治(1896~1933)の作品でした。

浅野晃氏(国文学者・詩人・立正大学教授 1901~1990)の『雨ニモマケズ』(教育新潮社 1965)を読み、その中に紹介された賢治の作品「銀河鉄道の夜」からは魂の不死、死者の生きる世界はあるというメッセージを受けとり、「いのちの体験」の過程で生まれた死の恐怖をのりこえることができたように思います。

彼は詩集『春と修羅』(1924)の「序」に次のように記します。

わたくしといふ現象は／假定された有機交流電燈の／ひとつの青い照明です  
／(あらゆる透明な幽霊の複合体)／風景やみんなといつしよに／せはしくせ

はしく明滅しながら／いかにもたしかにとりつづける／因果交流電燈の／ひとつの青い照明です／（ひかりはたち その電燈は失はれ）……

賢治には2歳下の妹がいました。トシ（1898～1922）です。トシは祖父宛の手紙に次のように述べていました。

どうしても人の身体はなくなり候ても自分の魂はいつまでもあるものと私は信じ居り候。そんならバ如何にして死後の世界に私共が居るかと云ふ事を考へし時は、全く居ても立っても居られぬ苦しき思ひが致され候。

浄土真宗を信仰する家に生まれながら、法華経信仰を共にしたトシの死後の行方に悩んだ賢治の姿は『春と修羅』に見ることができます。

1960年代後半から70年代を生きた私の青年期は、中国の文化大革命、ベトナム戦争、わが国では大学紛争、そして新宿騒乱、浅間山荘事件等、火災ビンが街で炸裂する政治の季節でした。マルキシズムがもてはやされ、反面「いのちの体験」のような心の内面のことがらは軽視されていたと思います。

## 『かいまみた死後の世界』の衝撃

そのころは高度経済成長の時代でもありました。10年ほど前、池上駅前通りにあった古書店で立原正秋氏（1926～80）の『春のいそぎ』（1968）をもとめました。この作品はその時代の空気を伝えています。

一年のあいだに二つのひつぎの柩をおくりだした不破家では、にわかに家の荒廃が目立つようになった。

「とうとう三人だけになってしまったわ」

葬儀が終わったとき保江が言った。

「しょうがないさ。にんげん、いつかは死ぬんだ。嘆いたって死人が還ってくるわけではなし。ま、なんとかやっついていこうよ。」

私の20代が終わろうとする1977年の夏、故郷の町にある小さな書店の棚で1冊の本と出会いました。『かいまみた死後の世界』（評論社 1977）です。タイトル

はきわものめいていますが、原題は『LIFE AFTER LIFE』。著者はレイモンド・A・ムーディ・Jr. (1944年生まれ)。哲学博士と医学博士の肩書を持ちます。『死ぬ瞬間』を著したエリザベス・キューブラー・ロスが序文を記し現代選書の1冊として出版されました。

この本は臨死体験ブームの端緒となりました。ムーディは次のように述べています。

わたしは本書において死後の生命の存在を立証するつもりはない。(略) 死後の生命の存在の「立証」が、現在可能だとも思っていない。

とはいえ、ムーディ自身、巻頭で「死とは何だろう？ 地球上に誕生した時からずっと、わたしたちはこの疑問をかかえてきた」と述べているように、真正面から、体験的、実証的に死の問題に迫ろうとしました。この本は私に衝撃を与えました。書店の棚にこの本を発見したときの心のときめきを今でも覚えています。なぜか？ 私は死後の世界と〈私〉の死後生存を科学的、実証的に知りたかったのです。

科学に深い関心をいただき最新の知識をもっていた宮沢賢治は「思索メモ」に著述の構想を次のように記していました。

## 序

科学に威嚇されたる信仰

本述作の目安、著者

一、異空間の实在 天と餓鬼 分子—原子—電子—真空—異单元—異構成

幻想及夢と实在、

二、菩薩仏ならび並に諸他八界依正の实在

内省及実行による証明

三、心的因果法則の实在

唯有因縁

四、新信行の確立

この「異空間」とは、人が死後生存する別の世界を指しています。賢治は仏教的世界観が实在することを証明したいと考えていました。

エリザベス・キューブラー・ロスやレイモンド・ムーディの業績をうけて、1986年、ユング心理学者河合隼雄氏は『宗教と科学の接点』（岩波書店）を出版し、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」を臨死体験と比較しています。さらに、立花隆氏は1991年8月から「臨死体験」を『文藝春秋』に連載、94年に『臨死体験（上・下）』として出版しました。昭和末のバブル、そして平成に入ってからバブル崩壊の時代は「宗教の時代」ともいわれ、第3次宗教ブームにわいていましたが、——1995年3月、オウム・サリン事件が起こりました。

## 「臨死体験」ブームと現代宗教研究所

平成22（2010）年11月、サンフランシスコ近郊の国際開教布教センター（現在、国際布教センター）を訪ねました。平井智親所長（現在、神奈川県安国論寺住職）の案内によって、私そして山口功倫所員（当時）はカリフォルニア大学バークリー校とスタンフォード大学に行きました。スタンフォード大学の広く明るいキャンパスの一角には創立者を記念した大きな礼拝堂がありました。静かですす暗い内部に入ると、私は椅子に座り安らぎのひとつときを過しました。

スタンフォード大学は心霊研究、超心理学の研究拠点の1つでした。『長男の出家』で芥川賞を受賞した三浦清宏氏は次のように述べています。

ロンドンやニューヨークから遠く離れた太平洋側の田舎町に設立されたスタンフォード大学で、創立者のリーランド・スタンフォードの一族が一九一一年に五万ドル、一九二三年に四〇万ドルもの大金を心霊研究のために寄付したことである。この寄付はやがて大きく実を結び、スタンフォード大学は第二次大戦後、心霊研究の後身である超心理学の拠点の一つになるのである。（『近代スピリチュアリズムの歴史——心霊研究から超心理学へ——』講談社 2008）

スタンフォード大学の礼拝堂は心霊研究の拠点の1つであったことを物語る靈気に満ちていました。

ところで、現代宗教研究所は第22回教化学研究集会（平成6年〔1994〕2月1日広島県福山市良縁閣）を開催し、「人生は靈的巡礼の旅——スピリチュアリズムの死生観——」というタイトルで近藤千雄（かずお）氏が講演しました（内容は『現代宗教研究』第29号に掲載）。私がスピリチュアリズムの本を読み、記者であ

る近藤氏が同じ福山市在住であったことから講演をお願いしました。自宅を訪ねると、静かに翻訳の仕事をしていた姿が印象的でした。氏には『コナン・ドイルの心霊学』（新潮選書 1992）という著述があります。

西嶋宏明師（広島県法華寺住職＝当時）は当日のパネルディスカッションの問題提起「スピリチュアリズムに触れて思うこと」（同第29号所収）の中で次のように述べています。

近藤千雄先生のお話を伺ったり、ご著書も読ませていただきましたが（略）最後に感じたことは、一番靈魂の扱いに近い立場にある私が、その扱いが粗略であったのではなかろうか、儀礼的に走り過ぎていたのではなかろうかということを感じ、大変反省をさせられた次第でございます。

また、第27回中央教化研究会議（平成6年9月6・7日 東京ヒルトンホテル）ではおおえまさのり氏による記念講演「死と再生のプロセス（～『チベットの死者の書』にみる人が死んでからの49日間～）」があり、29号に掲載されています。この講演の後、おおえ氏と赤堀正明師（現代宗教研究所主任＝当時）の「対談」が行なわれています。

この娑婆世界の他に、浄土や仏といわれる大生命はありはしないのだという見解が、大乘仏教の中の宗教的見解です。私自身の解脱という理解の仕方も、永遠とか解脱というのは、この娑婆世界のこの只今にしかないものだということです。

例えば昭和の初期に浅原才市という妙好人がおられました。彼は下駄職人であったのですが、かんなをかけながら、かんなくずに阿弥陀如来の歌を書き続けていったのです。そして書いているうちに、自分が阿弥陀になるのではなくて、阿弥陀が下駄を削っているのだという世界に入ってってしまったのです。自分が阿弥陀を今生きてあるのに、どうして死んでから阿弥陀の浄土に行くのかね。今こうやって下駄を削っているということの他に、阿弥陀があり浄土があるのではないと。才市は世界をひっくり返してしまったわけです。

と話すおおえ氏に赤堀師は、

日蓮聖人は「今本時の娑婆世界」という言葉で、娑婆世界であっても娑婆を超えた、本来の意味の仏に生かされている今の自分、時間というとらえ方をしています。

と応じて、興味深い内容が続きます。

臨死体験、スピリチュアリズム、チベット仏教など、この時代の思潮はこのように当研究所の活動に反映していました。

その影響は、他にも、たとえば「お題目総弘通運動」推進のためのテキストとして作成され、私も深くかかわった『日蓮聖人信行日課』（護法伝道部 春秋社 1993）、『御遺文習学シリーズ』全12冊（伝道部 日蓮宗新聞社 1994～2002）に見ることができます。

たとえば、習学シリーズ⑤『病によりて道心は起こり候か』（1996）は『妙心尼御前御返事』をあつかったものですが、この中の次の一節、

只今に靈山に参らせ給ひなば、日出でて十方を見るがごとくうれしく、疾く死にぬるものかなと、うちよろこび給ひ候はんずらん。 （定遺1104頁）

に出会ったときには、「これこそ臨死体験！」と私の心はふるえました。その感激を同書のリードに、

1975年、アメリカで出版されたレイモンド・ムーディー博士の『かいまみた死後の世界』は世界に衝撃を与えました。この本によって多くの人が死後の問題を考えるようになったのです。聖人のこのご文章は、私たちにはっきりと死後の存在を示されたものであり、同時に死の不安を解消して下さるものです。

と書きました。このシリーズ⑤には、当研究所のメンバーである他の執筆者によって宮沢賢治の作品や『チベット死者の書』が引用され、当時の現代宗教研究所の空気を伝えています。

## マインドフルネスから観る〈私〉

その後、2000年代に入ると上座部仏教がわが国に入りヴィパッサナー瞑想を広



めました。さらにアメリカから「アメリカ仏教」(ケネス・タナカ 『アメリカ仏教』 武蔵野大学出版会 2010)、なかでもマインドフルネスが伝えられ、広く受け容れられています。そのもととなったZENは1960年代にアメリカに広まりました。2010年、私はサンフランシスコの禅道場のひとつ、Green Gulch Farmsを訪ねてからは、その土壌から生まれたマインドフルネスについて考えてみたいと思いました。なぜならば蓑輪顕量師が指摘しているように、それは止観(サマターとヴィパッサナー)を源流としているからに他ならないからです。

宗祖は止観の枢要である一念三千について、

「一念三千を識らざる者には仏大慈悲を起こし、五字のうちにこの珠を裹み  
末代幼稚の頸に懸けさしめたもう」 (『観心本尊抄』 定遺720頁)

あるいは

「何なる氏神有りて無尽の功德を修すとも、法華経の名字を聞かず、一念三  
千の観法を守護せずんば、退位の菩薩と成りて永く無間大城に沈み候べし」  
(『諫暁八幡抄』 定遺1835頁)

と示されています。

私はマインドフルネスを通して止観にアプローチしたいと思い、平成30年(2018)9月の中央教化研究会議のテーマにさせていただきました。そして翌年(2019)の3月には、奈良春日野国際フォーラム並びに元興寺で開催されました蓑輪顕量師主宰の「瞑想・マインドフルネス in 奈良— ところをみつめ、ところをみがく—」に森下恵王所員(当時)とともに参加しました。

元興寺では最初に蓑輪顕量師の指導による「坐る瞑想」と「歩く瞑想」を体験しました。

次にタイ・スカトー寺副住職プラユキ・ナラテボー師(1962年、埼玉県生まれ)による瞑想指導。平成30年(2018)の夏、現代宗教研究所のメンバーとともに池上・覚源院(鈴木秀行住職)を会場としてお借りしてすでに実修していました。

それは止(サマター、集中)の瞑想の1つ、呼吸に合わせて「仏陀(ブートー)」と唱える方法でした。吸う息とともに「仏(ブー)」と唱え、吐く息とともに「陀

(トー)」と唱え続けるのです。続いて観（ヴィパッサナー、気づき、受容）の瞑想の1つ、手動瞑想（ヨックムー・サーンチャンワ）の実修です。座り、右手と左手を使って14の動きをします。

手動瞑想についてプラユキ師は、

「(瞑想法は) いろんな要因でうまくいかないケースというのも割と多いんだ。それでちょっとお勧めしたいのは、恐怖や不安感がふっと湧いてきたときに、そういったものはさておいて、さっと手の動きに意識を戻すって方法だよ。手ってというのは今ここにあるよね。そう、その手。その手は思考やイメージの産物じゃないんだ。わかるかな？」 (『自由に生きる』 サンガ 2016)

と、軽妙に語ります。会場の2人連の女性は笑顔でうなずく。「心の闇が生じてきてもそれはそれでオッケー」と、プラユキ師の「オッケー」の連発に、笑い声がさざ波のように禅室（国宝）に広がりました。

最後に唐招提寺に伝わる釈迦念仏の実修。講師は石田太一師（同寺副執事長）。いにしえのエネルギーを感じる雄壮な気迫に満ちています。

石田師が「ンナー」と、長く唱えます。続いて私たちも息を吸い、吐く息で「ムー」と長く唱えます。同じように「シャー」、「カー」、「ムー」、「ニー」、「ブー」と唱えます。7字を1字ずつ1息1唱、呼く息の続くかぎり唱えると苦しいですが、5分ほど経過するとそのリズムに慣れます。そして20分経過すると、立つように指示されて禅室内を同じ調子で唱えながら歩きます。全部で10ばかりの柱が3列に並ぶ禅室内をうねるように行進すると、参加者に一体感が生まれ、身体もほぐれます。石田師の朗唱が一調子高くなると、釈迦念仏は速くなります。行道のスピードも一調子早くなり、盛り上がったところで終わりました。禅室内のようすは

神力品の十神力の時、十方世界の一切衆生一人もなく、娑婆世界に向って大音声をはなちて、南無釈迦牟尼仏南無釈迦牟尼仏、南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経と一同にさけびしがごとし。 (『撰時抄』 1008頁)

と宗祖がお示しのように、「如来神力品」の「咸皆帰命」の光景のようでした。私の幼いころ、うちわ太鼓をドン・ツク・ドン・ドン、とたたいたことや、池上本

門寺お会式のにぎやかなありさまが心に浮かびました。

ところで京都市上京区にある大報恩寺（千本釈迦堂）は1220年に開創。1227年に上棟された本堂は奇跡的に多くの戦火を免れた洛中最古の木造建造物であり、釈迦念仏の道場でした（『芸術新潮』 2018年10月号）。京都に遊学した宗祖は庶民の唱和する釈迦念仏の音声を耳にされたかもしれません。

たいへん貴重な元興寺の体験でした。令和2年（2020）からはコロナ禍のため、このような行事は中止となったからです。

マインドフルネス（止観）を体験することによって、私は自分の心（己心）を観察するようになりました。「透明な幽霊の複合体」と宮沢賢治が言ったように、〈私〉は透明であり、何も無い、無です。しかし、しばらくするとその空間に、〈三原正資〉という〈私〉があらわれてくるようでした。

藤田一照師（曹洞宗僧侶）は次のように指摘しています。

修行を始めて六年たったとき、師匠の命令でアメリカに渡り、三三歳のときから一八年近く現地で暮らしました。禅堂のあったマサチューセッツはアメリカのマインドフルネスムーブメントの発祥の地です。ジョン・カバットジン博士のオフィスも車で一時間のところにありました。アメリカから帰ってくると日本でもマインドフルネスという言葉が聞くようになっていました。

今世間で話題になっているマインドフルネスは世俗的なマインドフルネスです。世俗的なマインドフルネスと仏教のマインドフルネスは前提が違います。  
(略)

「私」というのが最初にあって「この私がなんとか幸せに、なんとかましになるため」にマインドフルネスがあるのではありません。その私という錯覚から覚めるためにマインドフルネスが開発されているんです。

普通「I have a mind.」と言いますが、仏教的には「Mind has I.」なんです。逆の考え方なんです。mindがIを作り出しているのに、Iは自分がmindを持っていると勘違いしている。（『別冊サンガジャパン3』所収「シンポジウム マインドフルネスと幸福学の未来」 サンガ）

宗祖は「心の師とはなるとも心を師とせざれ」（『曾谷入道殿御返事』 定遺913頁）と経典を引用してお示しです。

## 幻想の私（ファントム セルフ）

堀澤祖門師（天台宗三千院門主）は『枠を破る』（春秋社 2017）の中で、既成教団の宗教家に対してスピリチュアルな人たちをより高く評価し、その中でもパリ在住の大和田菜穂さん（1975年生まれ）について「日本人の若い女性がここまでの境地に達したものと感嘆し」て、大和田さんの「目覚めの経験」を紹介していました。

2009年にパリに移住しました。（略）パリにはたくさんの（非二元の）スピーカーがトークをしに来ていました。

それから数年にわたって、いくつもの目覚めの経験や、深い理解を得る瞬間の経験をしました。（略）

一番大きな目覚めの経験をしたときは、「私」が数日間いなくなり、その後、「私」が帰ってきました。帰ってきたときには、脳がおかしくなったかと思いました。

そして、ある日のことです。ぼーと近所を歩いていると、突然「菜穂がもうそこにはいない」ということが起こりました。そのとき同時に、「私」以外の何かは「もともと菜穂はいなかった」ことに気づき、「私」というエネルギーは完全に「全体」の中に融けてなくなっていきました。同時に、すべてが残りませんでした。何年もの探究のすえ、苦しみは完全に終わりを迎えたのです。それは想像していたものとはまったく違っていて（略）大きな驚きでした！

そこで認識されたのは、苦しんでいる誰かというのは最初からいなかったということでした。これまで存在していたものはライフだけだったのです。（略）

すべては一つのエネルギーが形を変えて表れたものです。目に見えるもの、見えないもの、感覚や音、思考、イメージその他、この世にあるものすべては同じ一つの生命エネルギー——私はライフと呼んでいます——の表現であり、本当は分離というのは存在しません。実際はただ「全体」があるだけで、独立した個人というものも存在しません。そして、時間というものも存在せず、あるのは無時間の空間のみです。（略）。

自分が今まで自分だと信じてきた存在は、思考と身体感覚が、「誰かが身体の中にいるような印象」を与えているだけで、本当の自分ではありません。

神経科学の世界でも主張されてきていることですが、自己意識（私）というのは、脳が作り出した幻想です。つまり、今まで自分だと思っていた存在は幻想の「私」だということです。(略)

世界中が求めているのは、「全体」——すなわち分離の終わりであり、それは自己意識の不在です。

(『すでに愛の中にある』 ナチュラルスピリット 2015)

彼女の探究は2005年に始まった。ボストンへ行き、あるカンファレンスで1人の日系人に会い、次のような覚醒体験を聞きました。

彼は「自分が自分だと思っている存在は<sup>ファンタム</sup>幻想で、存在しない」と繰り返し言っていて、それを「<sup>ファンタム</sup>幻想の<sup>セルフ</sup>私」と呼んでいました。

私は堀澤師が紹介する大和田さんの体験を読んでいるうちに、この考えは私たちに身近な考えではないかと思うようになりました。たまたま必要があって『本妙日臨律師全集』を開いていると、次のような文章に出会いました。

臨終に死する身は、此世にてかりにあつめたる地水火風がもとへかえるなり、本有常住の当体蓮華の三身は死すると言う事なし。寿量品に三界之相無有生死と説れ、観心本尊抄に仏既過去不滅未来不生所化以同体と述たまへるは是也。所化とは我等凡夫妙法を持つものを指すなり、又臨終にくるしむ心は無始以来の妄想にて実体なきものなり、譬へば夢の中の我身の如くなるものなり、夢の中にて夢を寤と思ふ故、夢中の種々の事起りて苦楽を見るなり、夢覚ぬれば皆虚妄なり、妄想心もその如く妄苦をうくる也、本心は苦楽なし、又本心は虚空の明月の如きものなり、妄想は水中の月なり、水中の月は水に随て動き、雲によりてかくるゝ也、虚空の真月は寂然として常に照すものなり、虚空の月とは我本心の妙法なり、(略)

この「臨終大事」と名づけられた一章の中でいう「本心」とそれにたいする「妄想心」や「夢」は大和田さんのいう「ライフ」と「私」に該当します。19世紀頃までの人々の心に生きていた仏教が、現在は失なわれたのです。

マインドフルネスの提唱者ティク・ナット・ハン師の『ブッダ (Old Path White Clouds Walking in the Footsteps of the Buddha)』(1991 日本語版春秋社 2008) の次の一節も、同じことを語っています。

シッダールタは微笑んで、青空にくっきりと刻まれたピッパラ樹の葉を見あげた。(略)

木の葉はふつつ春に芽生えると人は思うものだが、シッダールタは、この一枚の葉は、太陽の光、雲、木、そして自分自身のなかにすでに存在していたことを悟った。葉は一度も新たに芽生えたことがなく、自分もまた一度も生まれたことがない。葉と自分はただここに現れているだけなのだ。生まれたことがないからには死ぬこともない。この洞察により、生と死、出現と消滅の観念が消え、一枚の葉と自分自身の真実の顔が姿をあらわした。

## 〈私〉の死後の世界

宗祖は『崇峻天皇御書』に次のようにお示しです。

法華経には、我深く汝等を敬ふ。涅槃経には、一切衆生悉く仏性有り。馬鳴菩薩の起信論には、真如の法常に薰習するを以ての故に妄心即ち滅して法身顕現す。弥勒菩薩の瑜伽論には見えたり。かくれ(隠)たる事のあらはれ(顕)たる徳となり候なり。(定遺1391頁)

とはいえ、このような〈私〉とは何か、をめぐる日本仏教の状況を、「インド大乘仏教よりもむしろヒンドゥー教に近い考え方」(『大乘仏教概論』〈記者後記〉佐々木閑 岩波文庫 2016)、「実有や実体の観念、常住論や有我論を仏教に持ち込もうとする志向は衰えず」(宮崎哲弥『仏教論争』ちくま新書 2018)と論評する声は止みません。

このたび鈴木隆泰師が『内在する仏 如来蔵』(春秋社 2021)を出版されました。どのようなお考えか、楽しみです。それはともかく…このような論争は、いつの時代でもあることでしょう。宗祖の『立正観抄』には、

止観は法華經に勝り、禅宗は止観に勝れたりと思て、法華經を捨てて止観に付き、止観を捨てて禅宗に付くなり。(略)

法華經の仏は寿命無量常住不滅の仏なり。禅宗は滅度の仏と見るが故に外道の無見なり。是法住法位世間相常住の金言に背く僻見なり。(定遺851頁)

という論争が伝えられています。

当時、国内では法然浄土教が隆盛し、大陸からは禅が伝来しました。さまざまの宗教が往来する現代日本の状況も変わらないのではないのでしょうか。その中で多死社会を迎え、加えてコロナ禍の中で人々はひとりで〈私〉の死に向き合わなければなりません。加えてベッドの上で死を迎えることができるとは限らない大災害の時代であります。

3・11の直後には多くの被災者が幽霊を見たといえます。

翌日の晩、夜の帳とばりが降りると、小野さんは家のまえを通り過ぎる人影を見つけた——親子連れ、友人同士の若者の集団、祖父と子ども。「みんな泥だらけでした」と彼は言った。「5メートルほどさきの場所から、こちらを見つめてくるんです。でも、怖くはありませんでした(略)」

(『津波の霊たち』 リチャード・ロイド・パリー ハヤカワ文庫 2021)

〈私〉が幽霊になるときを想像しなければならない時代であります。

私の心をうった幽霊談を紹介します。3・11後、石巻市のタクシードライバーが遭遇した幽霊現象の1つです。

「巡回してたら、真冬の格好の女の子を見つけてね」。13年の8月くらいの深夜、タクシー回送中に手を挙げている人を発見し、タクシーを歩道につけると、小さな小学生くらいの女の子が季節外れのコート、マフラー、ブーツなどを着て立っていた。時間も深夜だったのでとても不審に思い、「お嬢さん、お母さんとお父さんは？」と尋ねると、「ひとりぼっちなの」と女の子は返答をしてきたとのこと。迷子なのだと思います、家まで送ってあげようと家の場所を尋ねると、答えてきたのでその付近まで乗せていくと、「おじちゃんありがとう」と言ってタクシーを降りたと思ったら、その瞬間に姿を消した。確かに会話を

し、女の子が降りる時も手を取ってあげて触れたのに、突如消えるように姿を消した。明らかに人間だったので、恐怖というか驚きと不思議でいっぱいだったそうである。

（『呼び覚まされる霊性の震災学——3・11 生と死のはざままで——』東北学院大学震災の記録プロジェクト金菱清 [ゼミナール] 編 新曜社 2016）

ところで、立花隆氏が『死はこわくない』（文春文庫 2018）の中で語ったレイモンド・ムーディ博士のその後の人生と死後の世界への考え方が興味深かった。立花氏は語ります。

（ムーディは）年を重ね、「すっかりお互い変わってしまったね」と言いながら私たちの訪問を歓迎してくれました。（略）

ムーディは約20年前に取材したときには、「死後の世界」に否定的でした。しかしその後、精神を病んで自殺を図った際、自ら臨死体験をして、現在では「死後の世界がある」と立場をガラリと変えました。（略）臨死体験も科学的なアプローチで解明する方法もあれば、宗教的、神秘的な見方で捉えることもできる。（略）脳の中で実際に起きていることを別のコンテキストで語ったものに過ぎないというわけです。

令和元年（2019）9月、中央教化研究会議で講演したカール・ベッカー（別華薫）氏（京都大学大学院政策のための科学ユニット特任教授）は冒頭、「仏教は私たちの死後の世界の存在を前提として成立している」と語りました。

立花氏は『死はこわくない』を次のように結んでいます。

科学がどれほど進んでも、新たに「分からないこと」が出てくる。この「分からなさ」は、自分が死を巡る哲学で悩んでいた若い頃の「分からなさ」と実は大差がないように思います。人間とは何か。生とは何か。死とは何か。その謎を問い続けていくのが人間なのかもしれません。

それはまた、私たち僧侶、宗教者の大切な役割です。

この令和3（2021）年2月の末、品川駅の書店で若松英輔氏の『魂にふれる



—大震災と、生きている死者—』(亜紀書房 2021)をもとめました。

若松氏はその第1章の中で、私自身50年ほど前に読んだ上原専祿氏(1899–1975)の2冊の著作『死者・生者 日蓮認識への発想と視点』(未来社 1973)と『クレタの壺 世界史像形成への試読』(評論社 1975)を引用して、「生きている死者」との「共闘」を語っていました。よりよい世界を目指しての「生きている死者」との共闘こそ、これからの私たち僧侶のあるべき姿かもしれません。

諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ清浄なることを得せしめんと欲するが故に、世に出現したまふ。  
(方便品)

我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず。所以はいかん、汝等みな菩薩の道を行じて、まさに作仏することを得べしと。  
(常不輕菩薩品)

と『法華経』には〈私〉について明かされています。このような〈私〉として一瞬一瞬を正念して歩みたいものです。

『日本人と神』(講談社現代新書 2021)の中で、佐藤弘夫氏は「近代社会の特色は、この世界から人間以外の神・仏・死者などの超越的存在=カミを、他者として放逐してしまった」と指摘し、終末期医療や心のケアへの社会的関心の増加を例に述べています。

人生のストーリーは可視の世界、生の世界だけでは完結しない。(略)生死の双方の世界を貫くストーリーを必要としている。

〈私〉の歩みの先には、どのような世界が待ち受けているのでしょうか。

獄卒・だつえぼ(奪衣婆)・懸衣翁が三途河のはた(端)にて、いしやう(衣装)をはがん時を思食して、法華経の道場へまいり給べし。

(『寂日房御書』 定遺1670頁)

と宗祖が戒められるように、私はそこでありのままの〈私〉に出会うことになるのでしょうか。